

メッセージ伝播法入門

第8回講義資料

空間結合の現象論

九州大学

平成30年10月10日～10月12日

豊橋技術科学大学
電気・電子情報工学系
准教授 竹内啓悟

AMPの状態発展方程式[7-4,7-5]

状態発展方程式

AMPの反復 t セクション l におけるMSEは、大システム極限でMMSE($s^t[l]$)に収束する。

信号対干渉＋雑音比
(SINR)

$$s^t[l] = \frac{1}{W} \sum_{w=0}^{W-1} \frac{1}{\sigma^2 - (\sigma^2 - v^{t-1}[l+w])},$$

干渉＋雑音電力

$$\sigma^2 - v^t[l] = -\frac{1}{\delta W} \sum_{w=0}^{W-1} \text{MMSE}(s^t[l-w]).$$

境界条件

$$v^t[l] = \sigma^2 \text{ for } l \notin \{0, \dots, L-1\}.$$

初期条件

$$v^0[l] = 1 \text{ for } l \in \{0, \dots, L-1\}.$$

状態発展方程式の解

ポテンシャル

$$V(s) = vs - \int f(s)ds - \int g(v)dv,$$

$$f(s) = -\frac{\text{MMSE}(s)}{\delta}, \quad g(v) = \frac{1}{\sigma^2 - v},$$

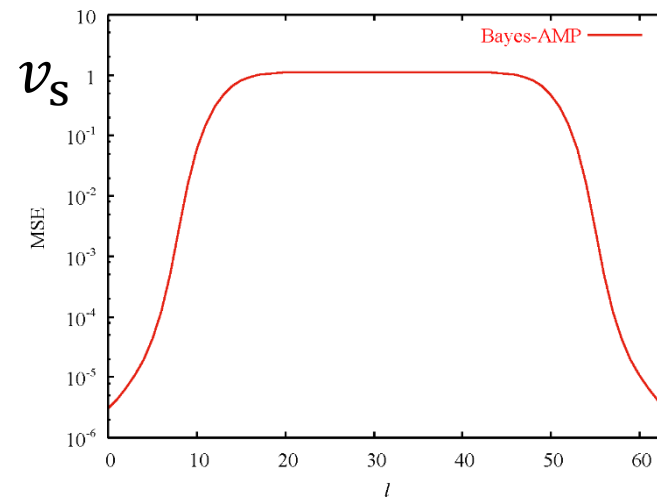
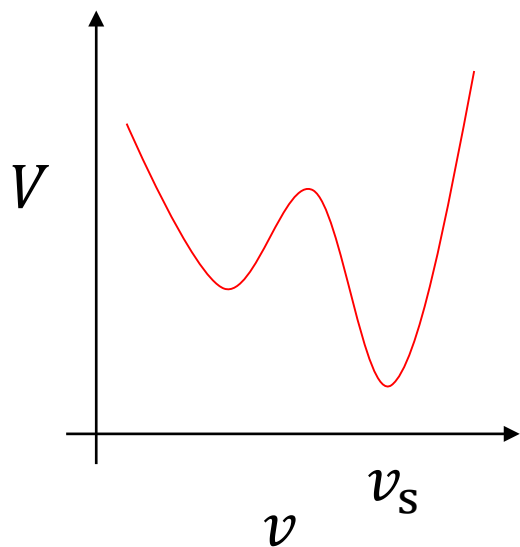
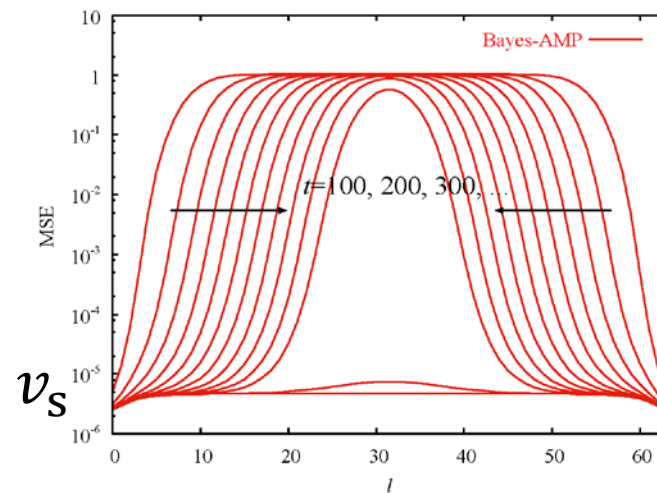
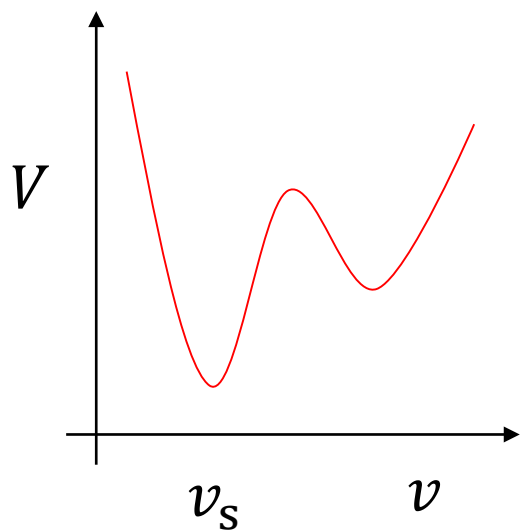
ただし、 $v = f(s)$.

f, g はともに単調増加関数である。

解の性質[7-4]

$V'(s) = 0$ を満たす解の中で、ポテンシャル V を最小化する解を s_s とし、 $v_s = f(s_s)$ を考える。境界における $v^t[l]$ が v_s 以下に固定されているならば、 $\gamma = W/L$ を一定に保って $L \rightarrow \infty$ とした後に $\gamma \rightarrow 0$ とした極限で、状態発展方程式の解は唯一であり、解はすべての l に関して $v^\infty[l] \leq v_s$ を満たす。

ポテンシャルの形状と解



ポテンシャル

ポテンシャルと自由エネルギーの関係[7-4]

ポテンシャル $V(s)$ は、ベイズ最適な推定法の性能を記述する自由エネルギー $F(s)$ と本質的に等価である。

$$F(s) = I(s) + \frac{\delta}{2} \{ \sigma^2 s - 1 - \ln(\sigma^2 s) \} + \frac{d}{2} \ln \sigma^2 .$$

AMPとベイズ最適な推定法との性能の定義が同じ

意義

観測行列に空間結合を施した場合のベイズ最適AMPは、情報理論的な圧縮限界を達成する。

証明

I-M関係式[1-9] $I'(s) = (1/2)MMSE(s)$ と $v = f(s)$ を使うと、

$$\begin{aligned} V(s) &= vs + \frac{2}{\delta} I(s) + \ln(\sigma^2 - v) + \left(\frac{d}{\delta} - 1\right) \ln \sigma^2 \\ &= \frac{2}{\delta} I(s) + sf(s) + \ln\{\sigma^2 - f(s)\} + \left(\frac{d}{\delta} - 1\right) \ln \sigma^2. \end{aligned}$$

不動点方程式 $s^{-1} = \sigma^2 - f(s)$ を代入しても、ポテンシャルの定性的な形状は変化しないので、

$$V(s) = \frac{2}{\delta} I(s) + \sigma^2 s - 1 - \ln(\sigma^2 s) + \frac{d}{\delta} \ln \sigma^2 = \frac{2}{\delta} F(s).$$



空間結合の現象論

状態発展方程式

$$s^t[l] = \frac{1}{2W-1} \sum_{w=-(W-1)}^{W-1} g(u^{t-1}[l+w]),$$
$$u^t[l] = \frac{1}{2W-1} \sum_{w=-(W-1)}^{W-1} f(s^t[l+w]).$$

連続体極限 $L, W \rightarrow \infty$ with $\gamma = W/L$ fixed.

$x = l/L$ 、 $s(l/L, t) = s^t[l]$ 、 $u(l/L, t) = u^t[l]$ とおくと、

$$s(x, t) = \frac{1}{2\gamma} \int_{-\gamma}^{\gamma} g(u(x+w, t-1)) dw,$$
$$u(x, t) = \frac{1}{2\gamma} \int_{-\gamma}^{\gamma} f(s(x+w, t)) dw.$$

空間結合の現象論

定常解

$$\frac{1}{2\gamma} \int_{-\gamma}^{\gamma} g \left(\frac{1}{2\gamma} \int_{-\gamma}^{\gamma} f(s(x+w+w')) dw' \right) dw - s(x) = 0.$$

$\gamma = 0$ 周りの2次のテーラー展開

$$\gamma^2 \left[\frac{g''(f(s))}{6} \left(\frac{\partial}{\partial x} f(s) \right)^2 + \frac{g'(f(s))}{3} \frac{\partial^2}{\partial x^2} f(s) \right] \approx s - g(f(s)).$$

定常解が近似的に満たすべき微分方程式

変数変換 $\tilde{u} = h(f(s))$, $h'(u) = \sqrt{g'(u)/3}$ を行くと、

$$\gamma^2 \frac{\partial^2 \tilde{u}}{\partial x^2} \approx \frac{s - g(h^{-1}(\tilde{u}))}{h'(h^{-1}(\tilde{u}))}.$$

ポテンシャル

$$U'(\tilde{u}) = \frac{\tilde{V}'(h^{-1}(\tilde{u}))}{h'(h^{-1}(\tilde{u}))}, \quad \tilde{V}'(u) = f^{-1}(u) - g(u).$$

U' を積分すると、

$$U(\tilde{u}) = \tilde{V}(h^{-1}(\tilde{u})) + \text{Const.}$$

変数変換 $u = f(s)$ を使って、 \tilde{V}' を積分すると、

$$\begin{aligned} \tilde{V}(f(s)) &= \int [f^{-1}(u) - g(u)] du = \int [s - g(f(s))] f'(s) ds \\ &= sf(s) - \int g(u) du - \int f(s) ds = V(s). \end{aligned}$$

U, \tilde{V}, V の定性的なポテンシャル形状は同一である。

古典力学

運動方程式

$$\gamma^2 \frac{d^2 \tilde{u}}{dx^2} = -[-U'(\tilde{u})].$$

$\tilde{u}(x)$: 時刻 $x \in [0, 1]$ における質量 γ^2 の質点の位置

境界条件

$$\tilde{u}(0) = \tilde{u}(1) = u_0.$$

初期位置と終了位置が指定された場合に、
力学的に可能な運動は何か？

力学的エネルギー保存則

運動方程式に $d\tilde{u}/dx$ をかけて積分すると、

$$\frac{\gamma^2}{2} \left(\frac{d\tilde{u}}{dx} \right)^2 + [-U(\tilde{u})] = \text{Const.}$$

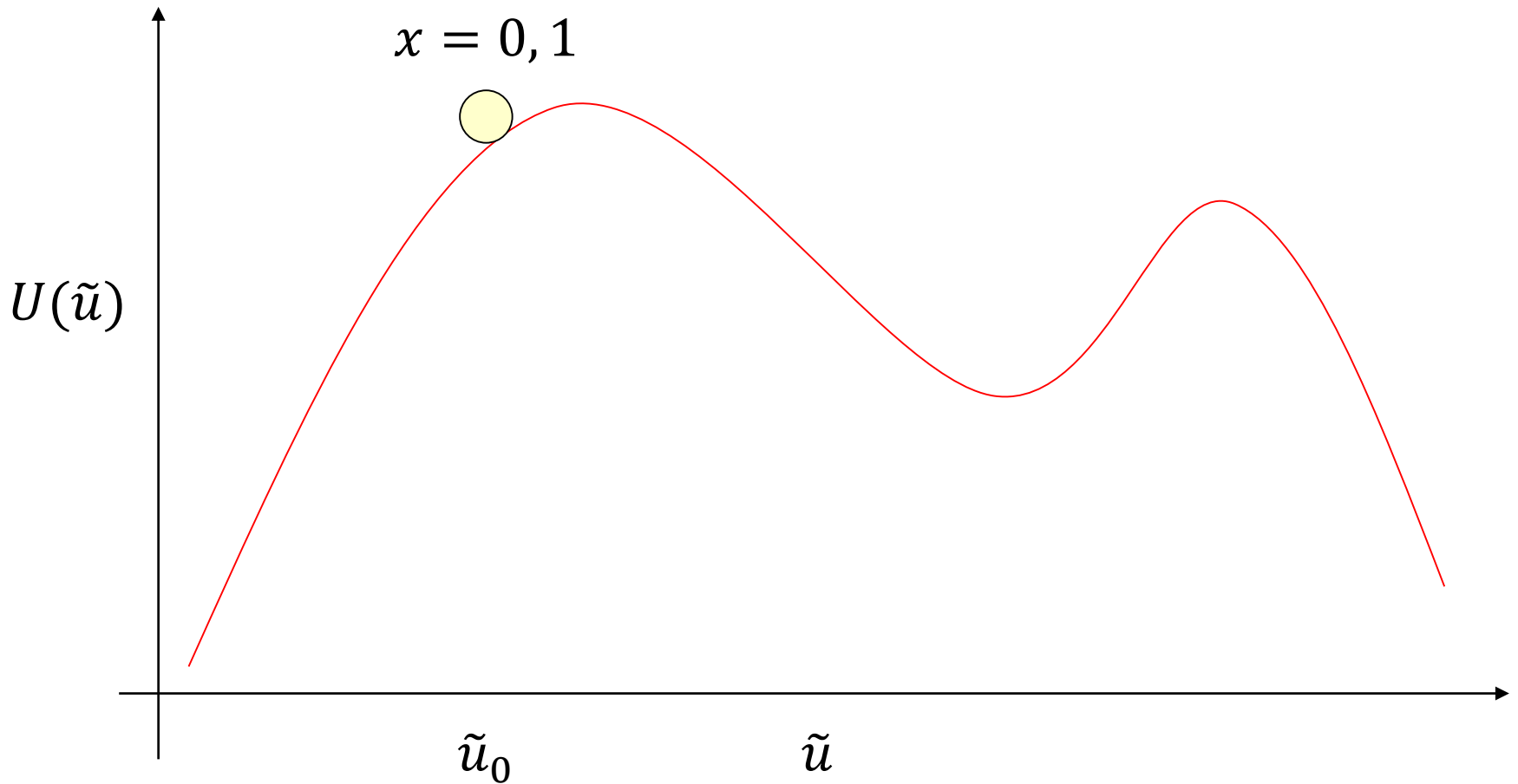
運動エネルギー 位置エネルギー

時刻 x_0 に位置エネルギーが高い場所 u_0 から時刻 x_1 に位置エネルギーの低い場所 u_1 ($-U(u_0) > -U(u_1)$)に移動すると、

$$\frac{\gamma^2}{2} \left(\frac{d\tilde{u}}{dx} \right)^2 \Big|_{x=x_1} = \frac{\gamma^2}{2} \left(\frac{d\tilde{u}}{dx} \right)^2 \Big|_{x=x_0} - U(u_0) + U(u_1) > 0.$$

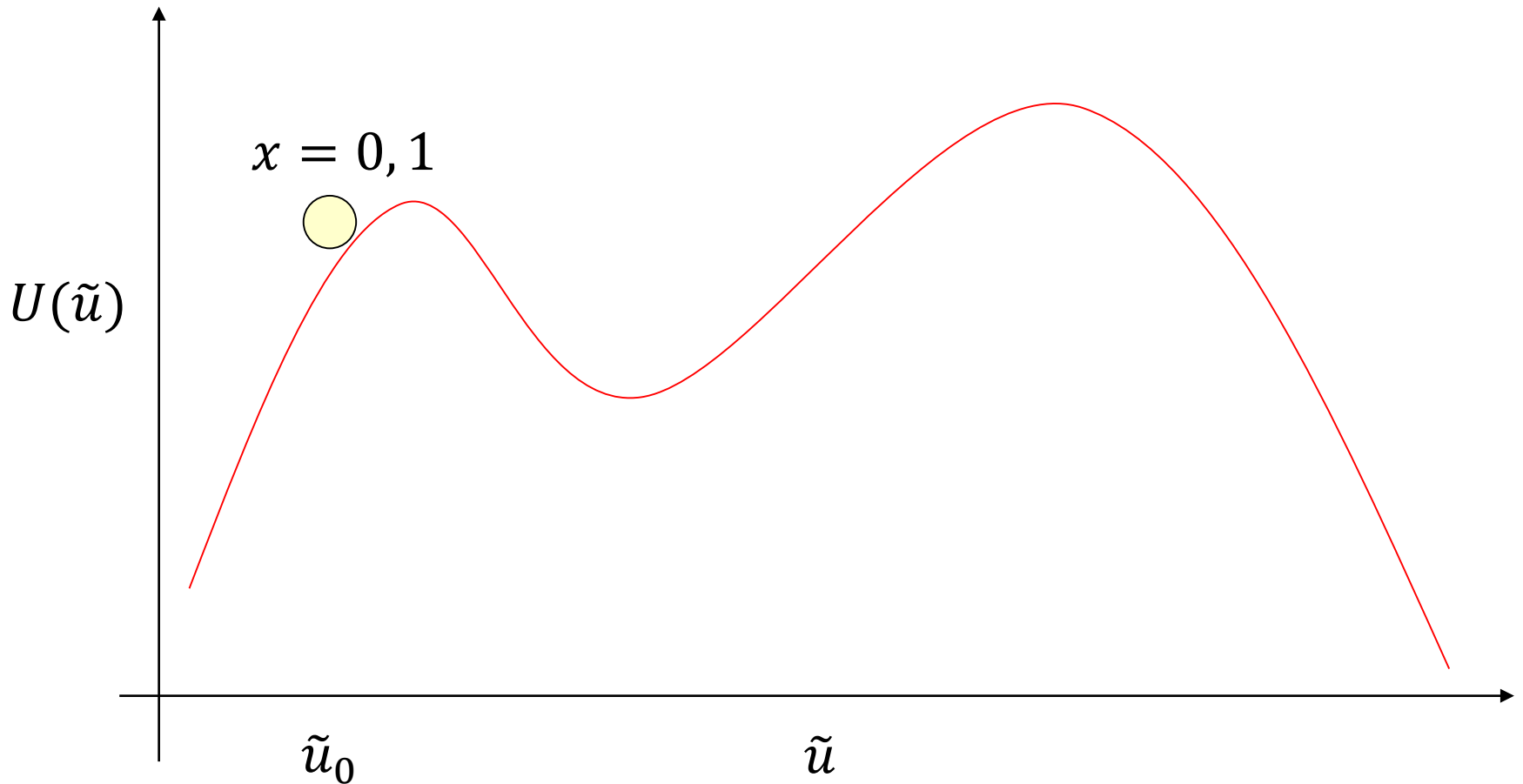
質点は位置 \tilde{u}_1 では静止できない。

可能な運動が唯一の場合



どんな運動が可能か？

可能な運動が複数の場合



どんな運動が可能か？

本講義のまとめ

ノイズなしの線形観測からの信号再構成

最小計算量 $\dots O(IMN)$

I : システムサイズに依存しない反復回数

最良な圧縮性能

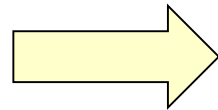
圧縮率 $\delta >$ 信号要素のレニー情報次元 d

空間結合圧縮センシングに対するベイズ最適AMPは、
最小計算量で最良な圧縮性能を達成する。

圧縮センシングの研究の流れ

1990年代

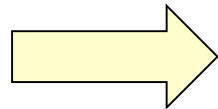
信号事前分布は未知



ST関数は最悪評価の意味で最良

2000年代

L1ノルム最小化による信号再構成



性能はST関数を使ったAMPと同じ

2010年代

空間結合＋ベイズ最適AMP

信号事前分布が未知の場合は未解決